

D-8 家族員のもつ現代の父親像について  
東京学芸大 田村 喜代

目的 家族が集団として共同生活を維持するには、構成員のおのおのが、立場や地位に応じた役割を自覚することも必要である。殊に chief-leader である父親が、家族員によりどんな認識をもちているかの問題は、父親の位階が权威型か友人型かで影響している。現在、同一視の機制による子どもの社会化過程において重要な課題となる。ここでは過去二年間の共同研究「家庭における教育機能の実態と問題点」の一部として（主査大塩俊介、総理府委託研究）父母子の実態による父親の現実・理想像を中心に報告する。

方法 調査時期は小学（5年）中学（2年）が545、1. 高校（2年）が546、1で、対象は学校サンプルによる無作為抽出を基本とし、学校側の事情で一部有意抽出となつた。実施方法は質問紙による自記式で、子どもは学校へ父母は留置法による。分析対象はユニットサンプル小学11校929、中学9校897、高校6校957で2地帯とする。

結果 理想の父親像は、代表的類型のうち全体的には社会承認型が極めど低く、家庭中心のマイホーム型に集約した。高校生では人格型に傾くものが増大する。現実の父親像は圧倒的に仕事中心型で「文化・教養」「ユニークで明るい」「セルフ・イメージを高める」などの評価は他に比較してよく高い。子ども自身の将来像もマイホーム型意識が大であり、高校生では自己の能力主義を志向するものもかなりあり、また父子別、男女別、発達段階別、地域別にも部分的に異質ある結果が示された。詳細な内容のクロス分析については目下進行中である。他の機会に発表の予定である。